

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

推進校実践報告書

- 1 学校名：岩美町立岩美西小学校
- 2 実施日時：2019年12月9日（月）10：40-12：00
- 3 対象：5・6年生 49名
- 4 派遣講師：笠本 明里 氏（北京・リオデジャネイロパラリンピック 水泳 日本代表）
酒井 正人 氏（パラリンピック 水泳 日本代表コーチ）

5 授業内容：アスリートとそのコーチによるパラリンピックに関する講演

2019年12月9日（月）に、岩美町立岩美西小学校にて、パラリンピックで水泳に出場された笠本選手と、コーチの酒井さんをお招きし、オリパラ教育が行われました。まず、酒井さんから、パラリンピックの起源や、様々な障害を持った選手が公正に戦えるようにするために、障害の程度によるクラス分けをしたり、ルールの変更や特殊な用具の使用が認められていることなど、パラリンピックに関する講話やパラリンピッククイズをしていただきました。講話の中には、視覚障害者の水泳では、目が見えないが故に誤って隣のコースに入ってしまったも本人は気付くことができず、しばしば選手同士が接触する危険と隣り合わせの状態で行われているという話もしていただき、初めて知るパラリンピックの世界に、子どもたちは大変驚いた様子で聞き入っていました。

笠本選手は、生まれつきメラニン色素が少ない特殊な体質であり、髪の毛の色も白色に近く、視力も極端に低い弱視だったそうです。小学生の頃は、一番前の席に座って眼鏡をかけていても黒板の字が見えにくかったそうですが、同級生には「見えない」ということを怖くて伝えられず、人の声や足音などを頼りに人物の特定をしたり、耳で先生の声在必死に聞いて授業を受けていたそうです。中学生のときに水泳に出会い、本来は持病のため日焼けをする環境は好ましくなかったそうですが、水泳がしたいという強い思いから、日焼け止めを丹念に塗るなどの工夫をして練習を続けたそうです。笠本選手は大学1年生のときにパラリンピックの世界を知り、できないことを互いに支えあう、今まで知らなかった素晴らしい世界に感動したといます。努力の成果もあり2008年の北京パラリンピックに出場した際は、障害を持って生まれてきたからこそ立てた舞台だと感じたといいます。そんな矢先、次のロンドンパラリンピックでは、得意とする背泳ぎが、笠本選手の障害のクラスでは実施されないことが決まり、種目変更を余儀なくされました。得意種目ではない種目で懸命に奮闘しましたが、ロンドン大会には代表入りすることができず、初めて水泳を嫌いになったというくらい大きな挫折を経験したそうです。そんなときでも、「次のリオ大会では背泳ぎがまた復活するかもしれないから、諦めずに頑張ろう」と励ましてくれた仲間が存在があり、また水泳に没頭することができたといいます。そして8年ぶりに念願だったリオパラリンピック出場を決めたときは、不安の中でも信じて泳ぎ続けてきて本当によかったと実感したそうです。最後に笠本選手からの、自分は目が見えない分、コーチやチームの仲間など、本当に多くの人に助けられてパラリンピックに出ることができたと思っているので、みなさんも友達同士で助け合ってがんばってくださいという、子どもたちへのメッセージで締めくくられました。

6 実践の様子



講師の紹介の様子



講師の笠本明里さん



酒井コーチの講話の様子



障害に応じた様々なルールがあることの説明



パラリンピッククイズの様子



質疑応答の様子



記念撮影



パラリンピックで使用されるブラックゴーグルを順に着用する子どもたち